

# 北海道における農作物構成とその類型(続)

## —— 北海道農業空間構造論 その2 ——

内 田 実

### 6. 諸地域の農業構造(続)

#### 2) 道南地帯

道央と道南の境界は石狩低地帯西縁で区切られ、市町村界の関係から小樽毛無山から朝里岳・余市岳・無意根山・喜茂別岳・白老岳・オロフレ山・鷲別岳を経てチマイベツ川を境界とする。道南は朝里岳・ニセコアンヌプリ・幌内山・長万部岳・太櫓岳・雲石峠・突符山・鍋岳(駒ヶ岳)に至る分水嶺によって日本海側と内浦湾側に二分され、日本海側は遊楽部岳から毛無山・尾花岬により積丹側と半島南部に分かれる。この区分線は狩場山地の後志・松山の支庁界でも可能ではあるが、瀬棚、北松山、今金は内浦湾側との関係と積丹との中間的性格をもつため南部から分けたのである。

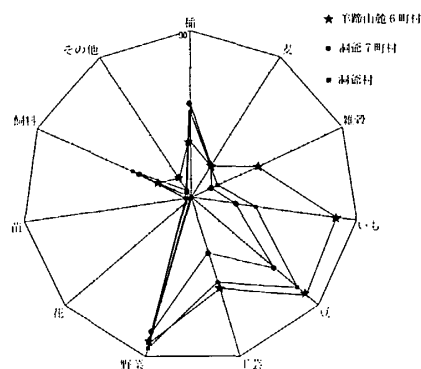
#### I 羊蹄・内浦湾沿海牧草・畑作地区

羊蹄山麓及び洞爺湖周辺はいずれも火山山麓の畑作地域として一単元をつくり、黒松内から森にかけての段丘と、狭い海岸平野と、小河川流域の水田・畑作・牧草地からなる内浦湾沿海町村とに分かれる。

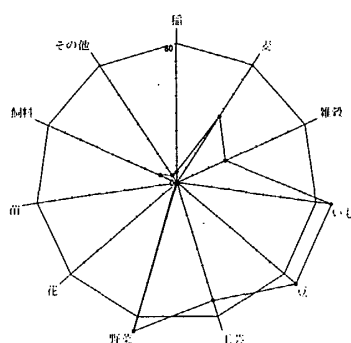
羊蹄・洞爺畑作区： 羊蹄山麓7町村、洞爺湖周辺5町村からなる火山山麓畑作区のうち、前者はかつてアスパラガス生産で全道一を誇り、豆類とばれいしょ、特に澱粉工場の数と量において後志を代表とする特色のある地区であった。近年食生活の変化に伴いアスパラガスは缶詰用ホワイトアスパラガスから生食用グリーンアスパラガスへ、澱粉用ばれいしょは種子用を経て食用へと変わり、アスパラガスの立地変動は羊蹄から上川・網走にまで拡大し、ばれいしょは十勝・網走(全道70%)に席を譲ったとはいえ、ニセコ・京極・倶知安で全道の7.5%を維持している。洞爺湖周辺は本道では道南函館・七飯・大野と同様に温暖な気候条件のもとで、早くから野菜類の生産に特色をもち、伊達群を抜いているが、洞爺・壮瞥・豊浦がこれに次ぐ。また豆類とビートは両地区共に生産が高く、畑作地帯の十勝・網走と類似する面も多いが、経営規模が小さいので集約的畑作への傾斜がみられ、それが多労のホワイトアスパラガスを成立させ、多種類の豆作を可能にした。また近年の野菜作に殆んど農家が参加するという形態を生じたのである。

経営規模からみると、羊蹄山麓の町村の方が洞爺周辺より比較的大きく、ニセコ・真狩・京極・倶知安は15ha未満で80%、壮瞥と洞爺がこれと同一範囲に入るのに対し、後者は10ha未満で80%で、1ha未満層の集積が顕著に現れている。一戸当平均でみると5ha代が豊浦から伊達を経て喜茂別へ、留寿都から洞爺を囲む形で分布し、京極の10haを最高に7ha代までの町村が羊蹄から南下する形で分布する。専業別では50%代に集中するが、比較的専業率の高いのは洞爺(71%)と真狩(67%)で、古くからの温泉地洞爺は壮瞥町で洞爺村は純農村であり、真狩はゆり根の生産地として知られる。

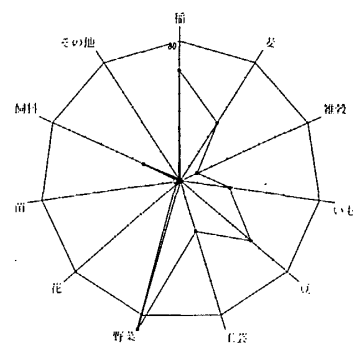
販売農家作物種類別収穫農家率(第26図)をみると、雑穀(そば、とうもろこし等)とばれいしょ(以下いもと略称する)を作付し販売する農家は、羊蹄6町村の全農家の41%と80%を占め、豆作81%、野菜作83%に達する。80%以上を占める町村で、いもは京極(87%)・倶知安・喜茂



第26図 販売農家作物種類別  
収穫農家率（1990）  
—羊蹄山麓と洞爺湖周辺—



第27図 販売農家作物種類別  
収穫農家率  
—京極町—



第28図 販売農家作物種類別  
収穫農家率  
—伊達市—

別であり、豆類は倶知安・京極・ニセコであり、野菜は倶知安を除く5町村で留寿都97%を最高に真狩・喜茂別の90%代、他は80%以上の高率となる。いずれの農家でも本地区の農家は野菜を販売用として作付し、豆類といもとビート（53%）が加わる。羊蹄6町村野菜作は面積2,084 haのうち490 ha（24%）がホワイトを含めたアスパラガスで、全道では留寿都が最近も増えて第2位となり、他は減少したが真狩は7位に止まっている。各町村において稲作のできるニセコ・倶知安・真狩以外の畑作の代表を京極について図示すると第27図の如く、麦類の少ない喜茂別・倶知安も含めて同一の形態をとる。

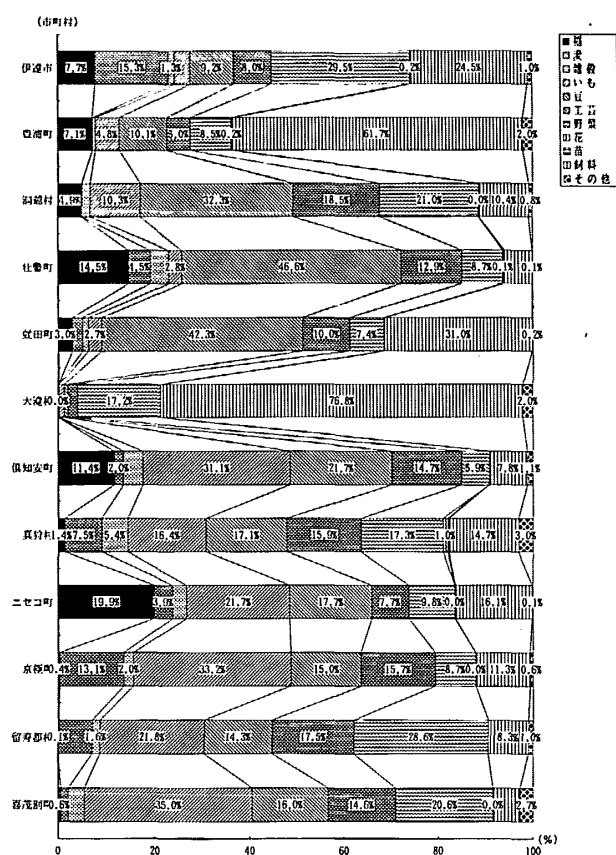
洞爺湖周辺町村の特長は羊蹄山麓に近似するも、大滝を除いてビートと豆の比率において各町村の特長が現れ、いずれも水稻作付農家が68%～31%を含み主力は野菜作となってきた。最近花卉栽培農家が伊達を中心に若干現れてきたがその比率は少ない。飼料作物では大滝54%を最高に豊浦・洞爺が41%、34%を占める以外は至って少ない。

その代表例を伊達で図示すれば第28図となる。大滝の場合リゾート化を含めて農家も減少し91%が野菜作、54%が飼料作となる。

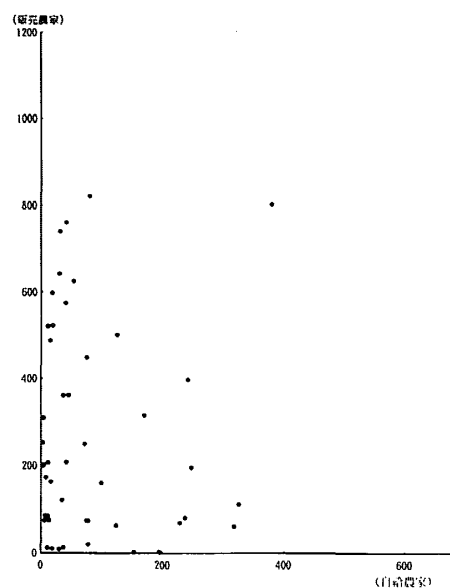
収穫面積の比率では第29図の如く、飼料作物の多い豊浦・大滝以外の作物比率ではいも・まめ・野菜構成の違いにビートが付加される様子を読みとれることができるであろう。

内浦湾沿海地区：本地区に包含される5町村のうち、夏季冷涼の東風による霧（ヤマセと同類）により日照不足は今迄に余り注意されていないが、森（町）北部から八雲・長万部・黒松内東部にかけて被害を及ぼす。そのため根釧や十勝海岸部より軽度にせよ農作物栽培に大きな影響を与え、その結果背景山脈東部の上記地域に草地を主とする酪農が発達したわけである。わけても八雲は北海道酪農の典型として、早来と共にブリーダー地域の地位を確立してきた。現在でも周辺町村のリーダー的役割をになっているが、酪農の多頭化、品種改良の革新はその中心地を根釧など道東へ移動させたのである。

酪農家率では八雲71%、長万部68%、黒松内45%、森12%、戸当頭数では47、39、38、30頭となっており、八雲の2才以上乳牛飼養農家の規模別では30～49頭44.4%、50頭以上7.2%であるから、51.6%の農家で総頭数の70%が飼育されている。水田農家は10%代で黒松内にいも・まめ・野菜、森に野菜30%と施設園芸12%が現れる。森町の場合駒ヶ岳によってヤマセがさえぎられるため多くの野菜も作られるが、濁川の温泉水と地熱発電の余熱利用によるハウス栽培によって、キュウリ、トマトが主に作付され、最近ではメロン作りも増えてきた。経営面積でみると森は5 ha未満で73%、八雲は10 ha以上が50%となるが、酪農の経営規模からいえば耕地の拡大が望めないため多頭化もあたまうちの状態にある。黒松内・長万部は1 ha未満25%、10 ha以上35%と畑作と酪農が混在する。専兼別では八雲専業59%、1兼21%に対し、森は専業41%、1兼12%、長万部・黒松内は専業46%、1兼20%代と両者の中間を示している。八雲の土地問題は長万部・黒松



第29図 洞爺・羊蹄周辺町村作物別収穫面積比率  
(1990)



第30図 渡島・桧山・後志における自給農家と  
販売農家の相関

内においても同様の課題を残しているため、  
やや詳しく述べたのである。

できる点で、加えて各市町村の総農家数に対する自給農家率が極めて高い町村を含むという点に特徴がある。これは道南の歴史的経緯のなかで説明されるが一方で漁村から発展した沿海集落から構成されるため、後出の農村が段丘ないし山麓に立地し、大きな平野をもたず、かろうじて函館と岩内の平野をもつのみで、短少狭小の河川の領域のみ水田地帯となっている。別の見方からすれば北海道らしくない北海道プロパーとは異なる本州の様相をもつのが道南である。

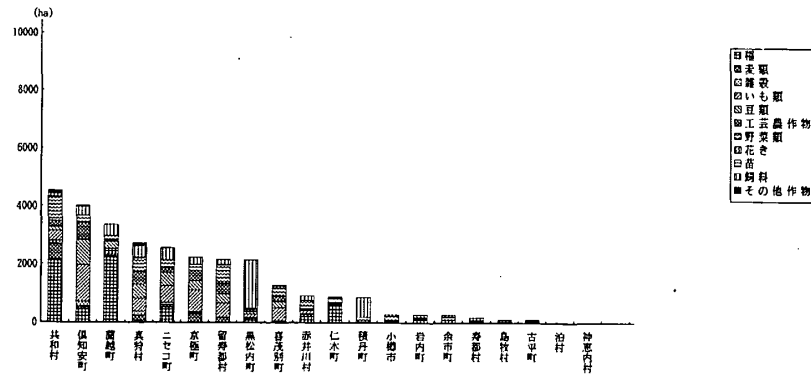
販売農家と自給農家を図示すると第30図の如く、自給的農家の総農家に対する割合は渡島33%、桧山25%、後志12%であり、後志は20町村中自給農家率50～60%が4町村で一番少ないが、渡島では60%が1、70%が3、80～90%が4町村を占め、桧山は50%に1、70%に2町村が入るから、自給農家率50%以上の町村は全体で36%、特に渡島に高率の町村が多く、南茅部は99.35%（総農家数155戸、販売農家1戸、残り自給農家）という数字が得られる。南茅部と同様なのは恵山（98.98%）で、農家総数では或程度農村の範疇に入るにもせよ販売農家が数戸ないし10数戸の町村を農村と呼ぶかどうか疑わしいものもある。それらの町村は上記の外、渡島では戸井、鹿部、後志では泊、神恵内である。漁村として農村からはさざるを得ない土地の狭少性と漁業としての経済基盤が原因となる。ただ漁業もニシンの衰退以後の沿岸漁業は特にあげうるものがない。内浦湾養殖漁業も赤潮の対策に苦しみ、漁業自体が小規模化してきている点は注意せねばならない。

札幌に近接する積丹側で赤井川は農村人口が減少し、農業が低迷するなかで、キロロリゾートが昨年開業したが予断を許さぬものがある。その隣接地余市と仁木は果樹生産地として成功を収め、リンゴ栽培面積の69%、生産農家の50%を占め、余市と仁木の比率では、なしは69%と42%、ぶどうは89%と72%、その他果樹として桃は43%と41%、果樹栽培農家は総農家数の72%の余市と50%の仁木となり、施設園芸農家が余市で3%、仁木で3%、残りは水田農家余市3%

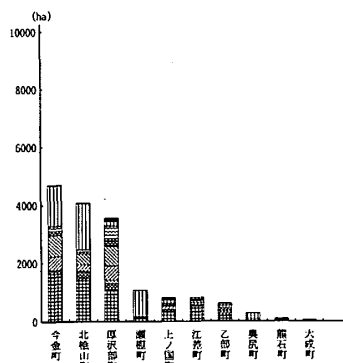
## Ⅱ 積丹・日本海沿海小規模混作型地区

本地区および道南半島南部地区に共通する事項は、小規模農地水田畑作混作型と規定で

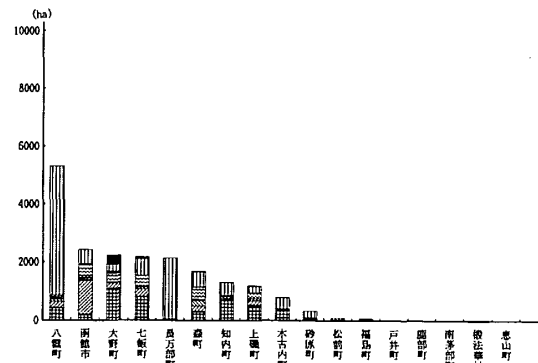
と仁木32%, 野菜作がいずれも9~10%を占めている。野菜のうちトマトは仁木, キュウリは余市が多く, いちごは仁木が道内第1位の26ha, 前記の豊浦15haの2町が突出する。仁木の南側の共和も水田農家70%, 野菜20%の町であるが, 野菜作において, かぼちゃは全道7位の150ha, メロン販売農家は夕張224戸をぬいて235戸となり, 栽培面積で夕張182haに対し217haと全道1位となった(1990年)。またすいかも富良野を抜いて202haの栽培面積で1位となり, 札幌・函館市場で競合する。仁木と余市の果樹と共和の野菜, 水稻面積2000ha余の共和と蘭越が特長的であるが, 戸当り経営面積は5ha未満が85%の仁木, 91%の余市, 46%の共和, 1ha未満が53%の岩内, 61%の積丹となる。各市町村における作物別収穫面積の実数を図示すると第31図A~Cとなり, 各市町村における多様性のなかにも類似性をみることができる。



第31図A 後志積丹・日本海沿海地区作物別収穫面積 (1990)



第31図B 桧山作物別収穫面積

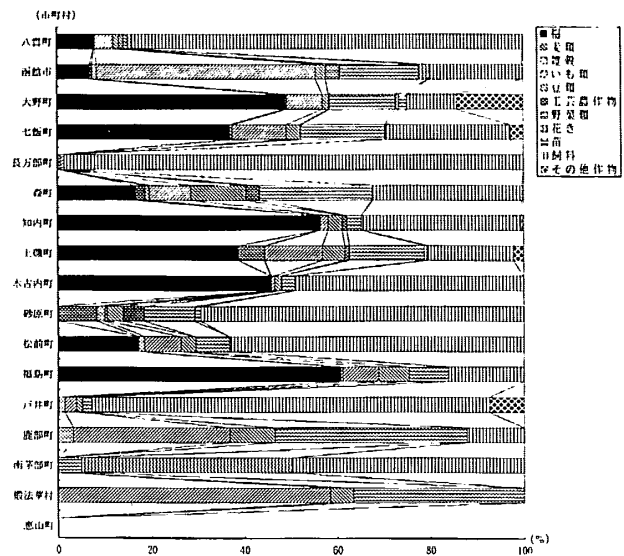


第31図C 渡島作物別収穫面積

### Ⅲ 半島南部小規模混作型地区

本地区のうち収穫した耕地面積の比較的大きいものは函館・大野・七飯の函館平野の市町村に厚沢部川流域の厚沢部の4市町村で外は2000ha未満である。本道農業の開始は道南の函館・七飯から始められ, 道南農業で水稻の優良品種の改良に成果を挙げた研究の中心が大野にある。しかしながら経営規模において零細な1ha未満層についてだけみると93%を占める熊石・大成, 74%の乙部, 53%の上ノ国等の日本海側と, 津軽海峡に面する松前95%, 福島77%, 木古内・函館55%, 太平洋岸の南茅部100%, 恵山97%, 樺法華92%, 戸井・鹿部・砂原90%をそれぞれが占めている。上記の市町村の順に専兼別にみるため専業比率についてだけ記すと熊石7%, 大成8%, 乙部11%, 上ノ国18%, 松前7%, 福島10%, 木古内25%, 函館19%, 南茅部3%, 恵山5%, 樺法華8%, 戸井5%, 鹿部4%で, 1兼は10%未満, 残りは2兼となる。木古内, 上磯, 大野, 七飯ですら, 専業:1兼:2兼は25:19:56, 30:23:47, 32:38:30, 42:37:21という割合になっていて, 道南の兼業化と零細性が浮彫りとなる。農作物収穫面積でみると上磯・知内・木古内・大野・七飯は水稻40~56%にいも・野菜に飼料作物が加わる(第32図)。

野菜のなかでドミナントなものについてみると、厚沢部・大野・上磯・七飯・函館が一団地を作りキャベツ、キュウリが多く、大根は厚沢部が留寿都について美瑛と同面積の234 ha、1位は東川271 haなので2位となり、ほうれんそうは七飯と函館、ねぎは七飯21 haと大野81 haに伊達59 haの3町村のみであるから両者で1位、メロンは厚沢部23 ha、ハウス面積では七飯と大野で68 ha、上磯14 ha、知内22 ha、ガラス施設は全道的に少ないが上記に上磯・函館を加え6戸0.56 ha、平成2年に施設で収穫した農家と面積は野菜が上記4町村で526 ha、124 ha、花卉・花木が84戸14.35 haとなり、函館の近郊野菜圏の形成のみでなく花卉市場にも参入する進んだ体質も備えている。経営規模の零細性のため労働集約的な農業経営に向かわざるを得ない各市町村の条件が反映しているのである。



第32図 作物別収穫面積の割合（渡島）

### 3) 道東地帯

一般に地形から北海道を区分する場合、前述のように四方海に面している四辺形の分水嶺で区分すれば4区分される。これがかつてのものであり、その原則は変える必要はないのであるが、農業景観から現状を区分するならば天北地方の牛群が留萌、上川北部まで畑作と混じりながら南下するため道央との境界は分水嶺や河川によらず初山別一美深ラインとなり、そのため宗谷丘陵は道東の延長上に併合され、分水嶺としての北見山地は通らずに西へ移行して名寄～上川盆地群の東縁、美深・下川の境を通して上川（町）をぬけ、大雪山の石狩山地から日高山脈を経由してえりも岬へ通ずる区分線で分けられる。

また道東の宗谷オホーツク・網走側と十勝・根釧側は、大雪山から斜行して知床半島の背梁山脈によって分けられる。宗谷オホーツク沿海と斜網の小区分は斜網と宗谷の作物構成の変化によって、上川、留辺蘂の境からサロマ湖となる。十勝と根釧は支庁界が白糠丘陵上を通り、これが農作物構成に反映されるから区分線として利用できる。さらに土地利用による細分化をみると、畑作物構成と草地或は飼料作物構成によって、宗谷オホーツク沿海と斜網地域は共に沿海部と内陸部に分かれ、十勝は沿海・山麓と中央部に区分され、根釧は飼料作物の分布から酪農畑作の内陸部と草地酪農専業地区に区分される。根釧の場合、昭和63年の飼料作物をもとに区分したが、今年に入って平成2年（1990）農業センサスが利用できるようになったので、作業の結果  $c_2$ （第7図北海道の地域区分参照）の上記の酪農畑作区は細分化しなくてもよくなった。

道東地帯のもっとも著しい特色は、道央の水田を基幹とする農業に対して、畑作と酪農を基盤におくという点につく。農業構造の空間配置からみれば、景観上同じに見える作目と農業経営との関係は複雑にからみあい、これに農政や地方の農政、ひいては農協や農産加工企業と農家という二重・三重のからみの中で生産が行われ生活空間が維持されている。加えて後継者不足と生産担当者の高齢化の問題は北海道農業の存続を左右する課題となる。農業景観は動かないように見えながら、その構造自体が長期間にせよ、短期間にせよ時代的変動という農業を取り囲む大きな波の中で変貌してきているにも拘らず、等値・等質の基本構造は大枠において変わらないというところに地域区分の本来の意味が見出されるのである。



一戸当たり乳牛頭数で見ればこの両地区の差異は殆どない。いずれも50頭前後で、70頭が興部・猿払・幌延に現れるのみで、40頭代が下川から幌加内にかけて分布する。そこで2才以上の乳牛飼養頭数規模別農家率でみると30頭以上飼養農家が80%以上を占めるのは稚内・猿払・浜頓別・枝幸・豊富・幌延で天塩76%、歌登で58%でその規模別乳牛頭数は第33図の様に豊富・天塩・稚内が相当数において高く、枝幸・幌延がそれに次ぐ。

経営規模別農家数では40～100ha層が50%を越える町村は稚内と猿払のみで、30ha層が中央値を占める枝幸・歌登・豊富に宗谷の特長が読みとれる（第34図）。

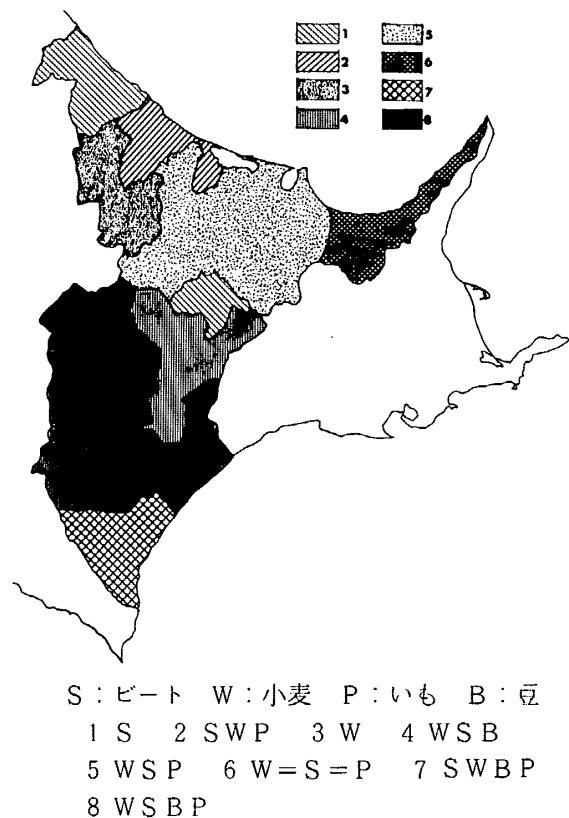
## （2）酪農畑作内陸部地区

宗谷オホーツク沿海地域市町村の作物で重要なものは牧草の外には麦、いも、豆、ビートであるから、それらの収穫面積を図示すると第35図の如く、名寄の延長上の美深は酪農依存型で本地区に入れてあるが、やはり上川の色が濃厚に現れる。しかしてこの形は他町村においても程度の差こそあれ表出しているのもであって、内陸部では麦、いも、ビートに牧草が加わる。網走に近づくにつれて豆の作付をます。図上で非常に僅かな作付しか示さない興部、豊富は草地酪農地域なのである。つまり天北の酪農の場合、専業化とは草地酪農以外の畑作には手を出さないという専業化をはたしてきたのであって、その点根釧も同様で、釧路の一部や十勝山麓の様に畑作と混在するというのは土地条件の制約と気候環境のいずれかによって決まってくる。

酪農専業地域は稚内から紋別まで南下し、内陸部に飼料（50%）、野菜、ビート、豆にいもと麦が加わるが、水稻との関係が境界線を明瞭に浮きあがらせ、水稻の限界線が酪農との境界ともなっており、一方で網走型の畑作主体に酪農が加わる混作地区が網走隣接地から滝の上まで延びてくる。

## II 斜網地域

斜網地域は網走から斜里まで、宗谷オホーツク沿海地域との境界以東の範囲を指す。斜網の特長は十勝とならんで畑作生産における北海道を代表する地域である。しかしながら十勝と近似するにも拘らず、同一地域とはならぬのは、作目構成の違いからくる。第36図は麦類・豆類・いもとビートの4大作物の作付収穫面積の組合せによる分布を示した。図上の凡例の1はビート、2ビート・麦・いも、3麦類、4麦・ビート・豆、5麦・ビート・いも、6は5の作物が各1/3、7ビート・麦・豆・いも、8麦と豆が主力作物で、ビートといもが若干入る。以上から網走地域の①中央部分が5の麦・ビート・いもで小麦が50～30%、ビート20～30%、いも10～30%、②斜里側はこの3作物が各1/3づつ、西側はビートが主力となって小麦といもが少し、③南と北東にビート80%以上でいも少しとなるのは、これに牧草を加えればよいわけで、豆類の比重が軽いことを意味する。これに対して十勝は中央部を小麦・ビート・豆・いもと4作物が並ぶがその比は、35：25：20：25程度と



第36図 網走と十勝の4大作物作付面積による区分図

なって換金作物の王者たる豆が小麦と共に浮上する。東北側の網走に接するところでもいがへり、南側の酪農地帯でもビートが主に出て小麦・豆・いもが加わる。両者共に一位に麦がくるが、二位以下では十勝に豆がいつれの町村においても、つまり山麓部でも現れるという点で、作付構成比では十勝と網走は異なるのである。

#### (1) 畑作沿海地区

統計入出力の都合から網走管内をグラフ化したので、若干宗谷オホーツク沿海地区に波及する。第37図に農作物第1位部門別農家数を示す。水稻作農家は北見・女満別・端野の38～22%に訓子府の10%以下に限られる。佐呂間・遠軽に僅かにあるが問題ではない。斜里から清里・小清水にかけて麦が40～60%、いも・雑穀が20～30%と斜里周辺の特長がみられるのに対し、北見・訓子府の野菜生産が大きな特長となり、前者は1696ha、後者は940haの収穫面積をもつ。北見の数字は札幌1575haよりやや多く、道東では芽室の2016haに次いで2位を占める。なお北見周辺の留辺蘂・津別・美深は600～700haと多い。

次に専業別・経営規模別をみると第38・39図の如く、専業60%以上が半数をこえる。2兼の多いのは山村又は都会の丸瀬布・白滝・上湧別・生田原・北見である。宗谷オホーツク側の酪農に少し畑作の入る紋別・雄武は専業率が60%、清里・津別は70%をこえる。経営規模では専業率の高かった清里周辺で20ha以上層が50%前後に達するのに対し、酪農の興部・雄武・西興部の50ha以上層に注目したい。

乳牛飼養頭数規模別農家率（第40図）では、いまだ20頭規模の農家も多くみられる点と、斜網の内陸側に大規模飼育農家が多くみられる。

#### (2) 酪農畑作内陸部地区

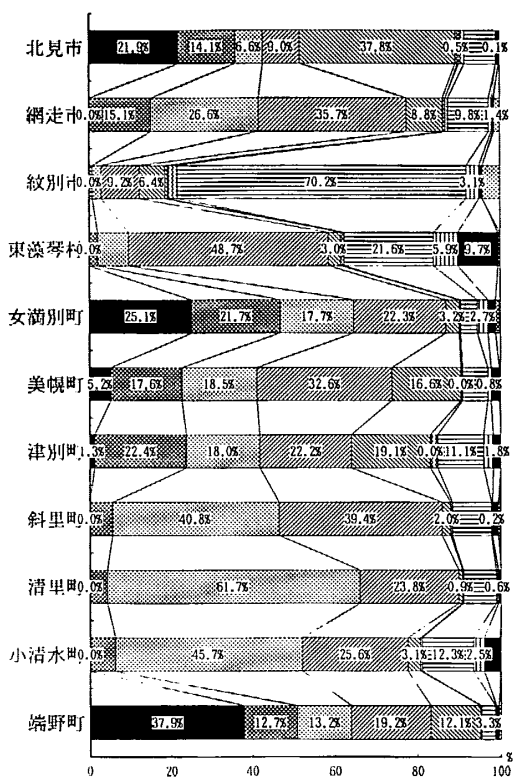
すでに言及した如く、斜網内陸部では酪農において経営規模のやや大きい農家がみられたこと、山間部ではビートの作付が増加するものがみられること以外は、小麦・ビートと酪農との共存が宗谷側にみられるのは土地条件との関連からみなくてはならない。経営規模拡大に伴う多頭化のなかで、経済効率からみると中規模農家で安定しているものも多くみられる。しかし多頭飼育移行が完了した地域と、畑作専業地とのほざまでの経営規模の拡大がはかり得ない町村等その差は大きいものがある。宗谷オホーツク沿海地区の内陸部が酪農に畑作が追加されるのに対して、斜網地域は内陸部まで畑作主体に酪農がプラスされている点が異なっている。

### Ⅲ 根釧地域

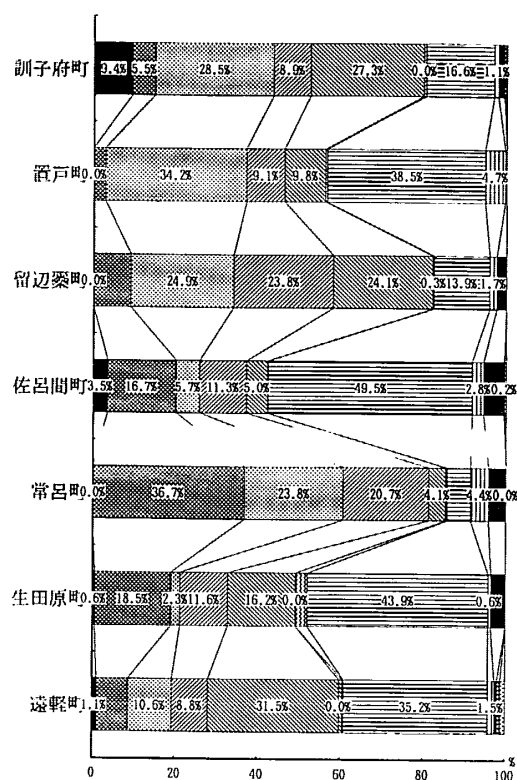
集約酪農地域、パイロットファーム、新酪農村計画等の国家的政策の施行に伴って、かつての根釧の面影は失せて、高いタワーサイロに酪農家の農場の名前が掲げられ、立派な牛舎が建ちならぶ景観は、一等の酪農地帯の自負すら感じられる。多頭化と草地改良と乳牛個体の改良に万人の期待が集まったのもそう古い話ではない。乳価問題で混乱し、設備投資が過剰か否かで議論され、酪製品と牛肉の自由化問題が直接直撃したのが道東の根釧地域であった。

新酪農村地区でも地元増反と新入植者と、それぞれの技術水準によって、その差は益々拡大してきた。新聞を賑わした離農、余りの借金に動きがとりにくい農協等これから解決しなければならぬ問題が余りにも多いのも、この地域の特長である。加えて経営者自体の老齢化に対する対応も試作段階より出てはいない。それを象徴的に現わしているのが、高額タワーサイロが現在使われていないものが多いというひとつの事実で充分であろう。何もこの問題は根釧地区に限ったことではないという点でも、つまり全道的な課題として、解決が急がれているのである。

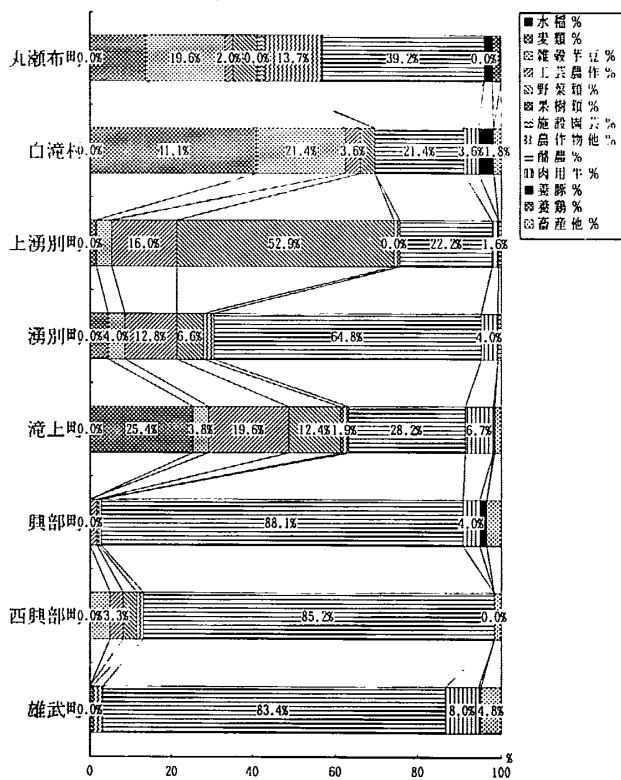




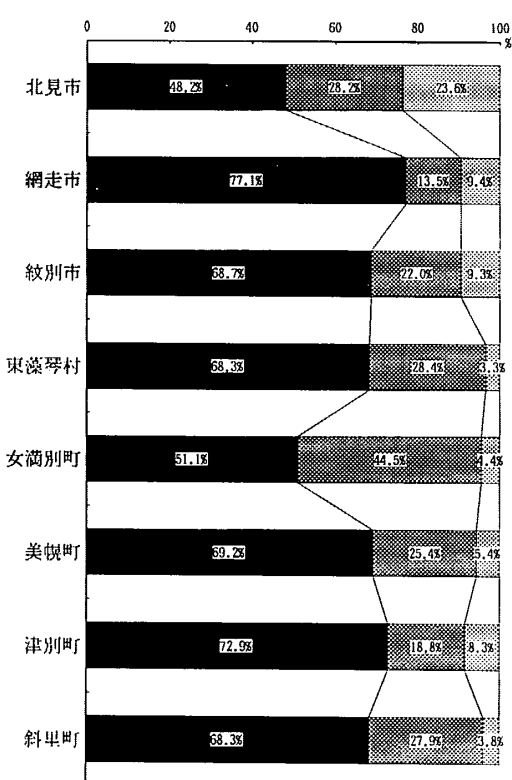
第37図 網走管内の第一位部門別農家数  
その 1



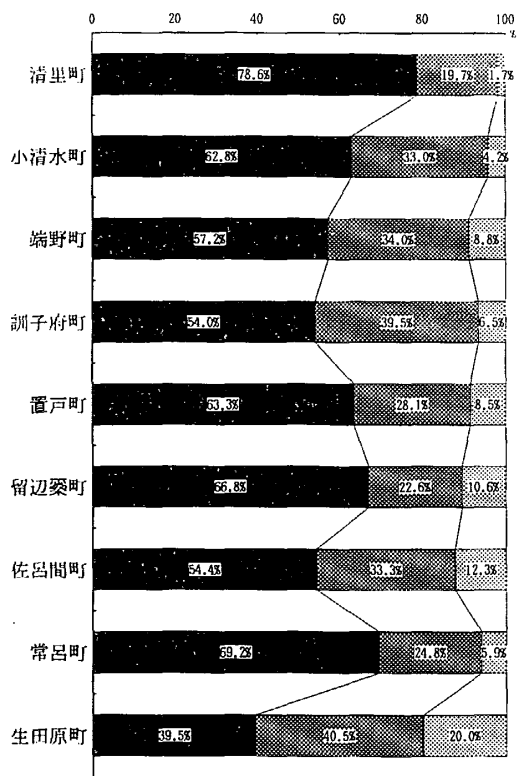
第37図 網走管内の第一位部門別農家数  
その 2



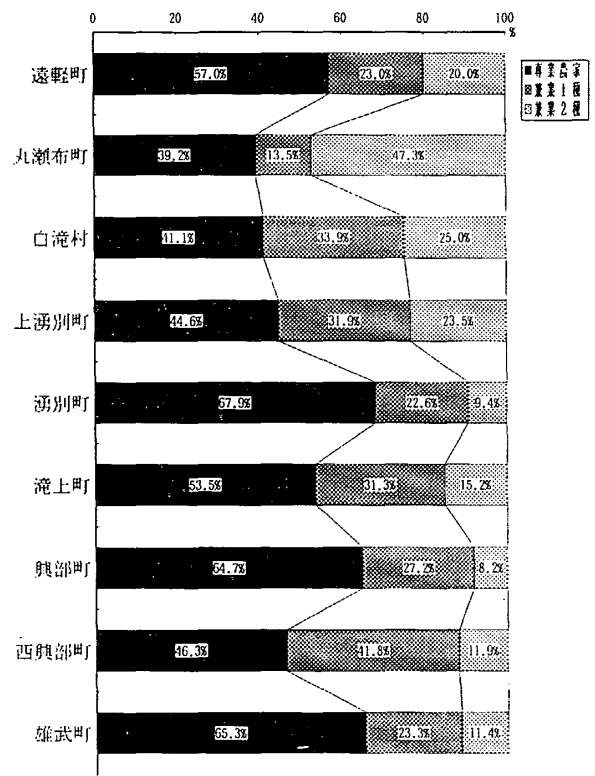
第37図 網走管内の第一位部門別農家数  
その 3



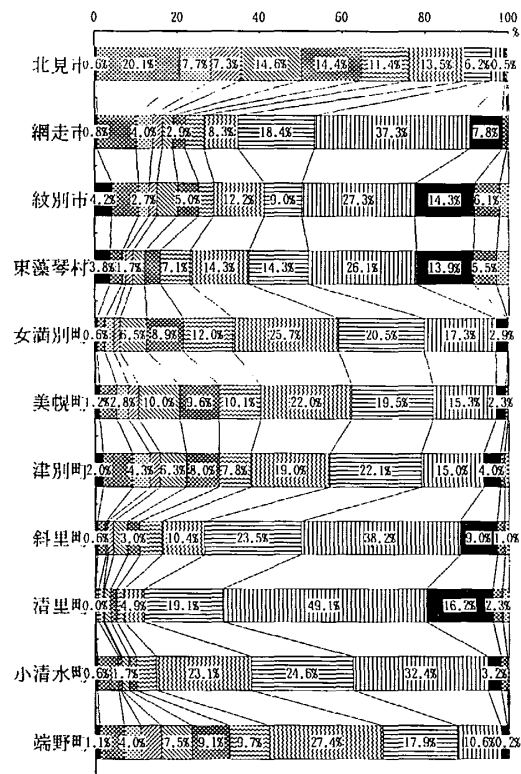
第38図 網走管内の専業農家、兼業農家の割合  
その 1



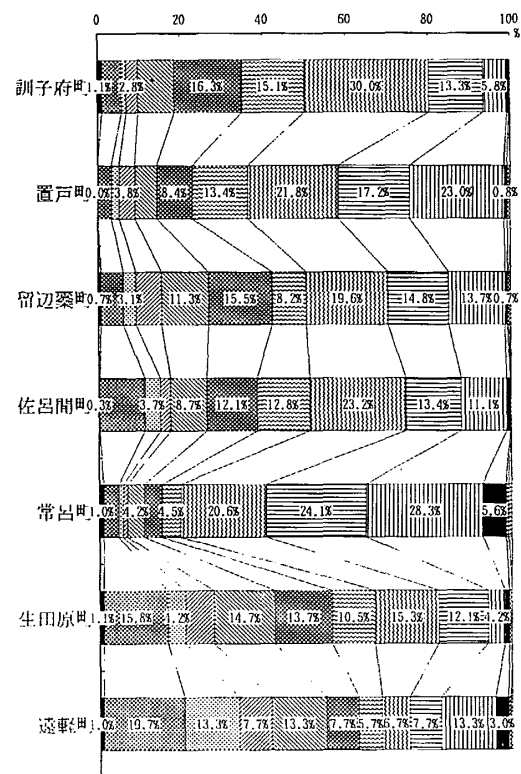
第38図 網走管内の専業農家、兼業農家の割合  
その2



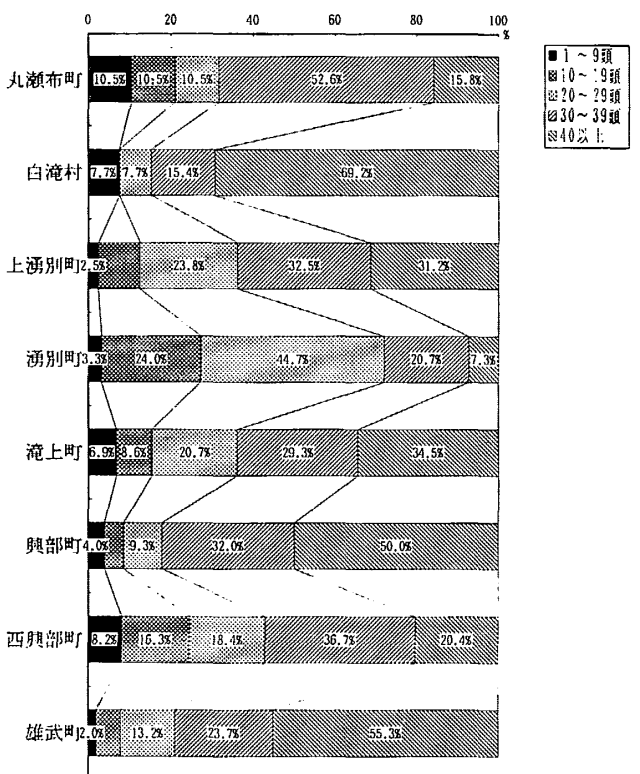
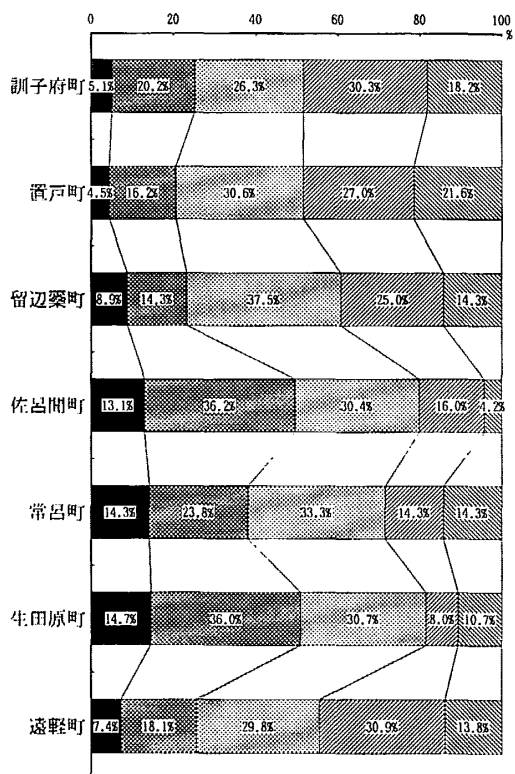
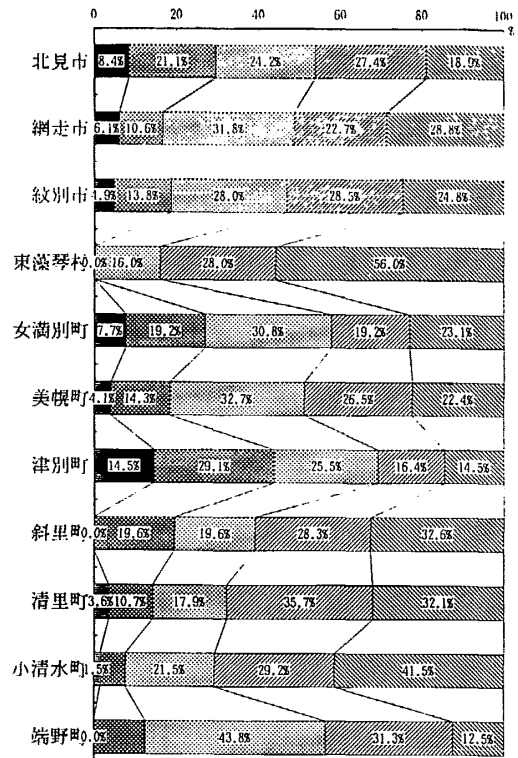
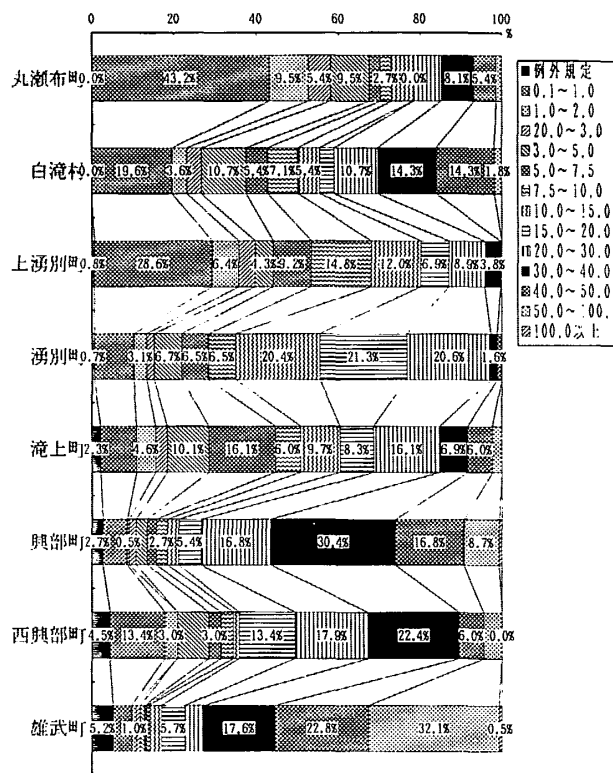
第38図 網走管内の専業農家、兼業農家の割合  
その3

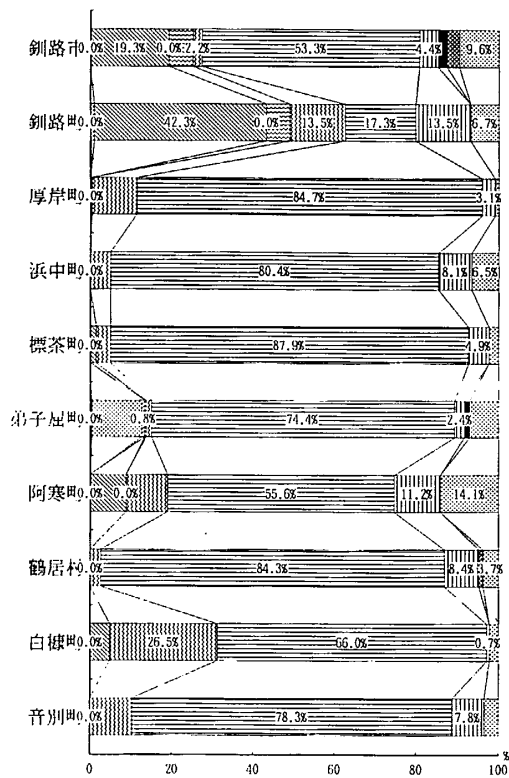


第39図 網走管内の経営規模別農家数  
その1

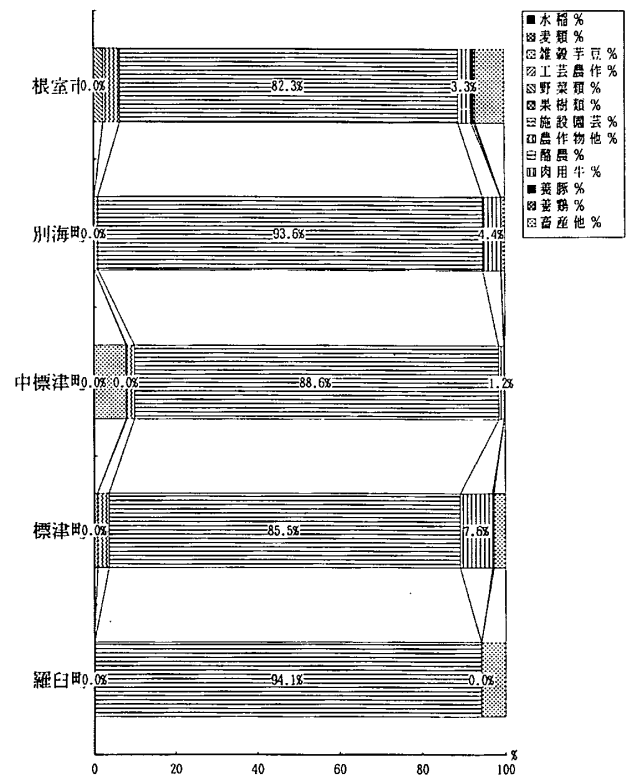


第39図 網走管内の経営規模別農家数  
その2

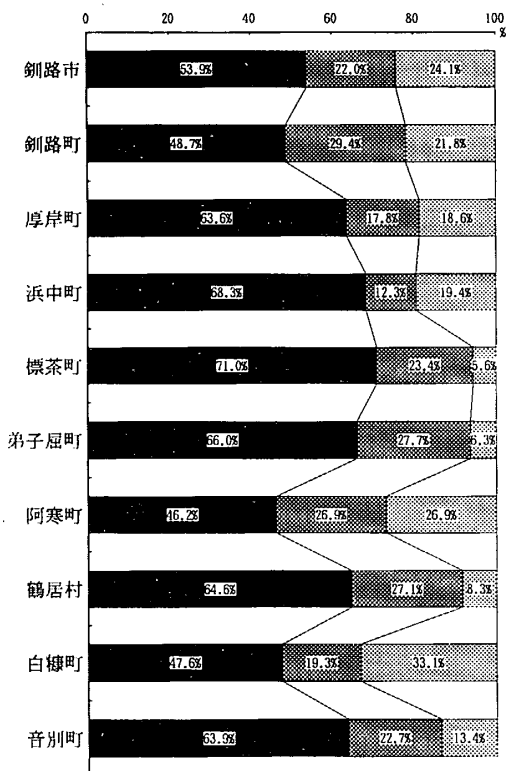




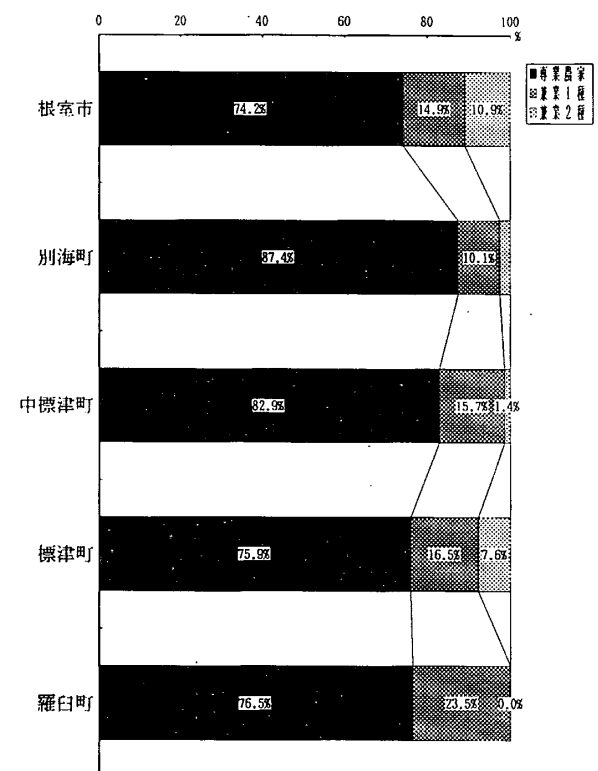
第41図 釧路管内の第一位部門別農家数  
その 1



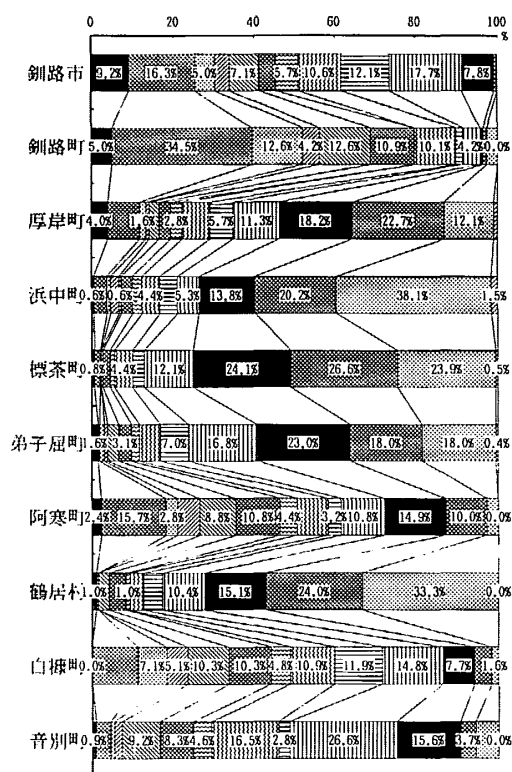
第41図 根室管内の第一位部門別農家数  
その 2



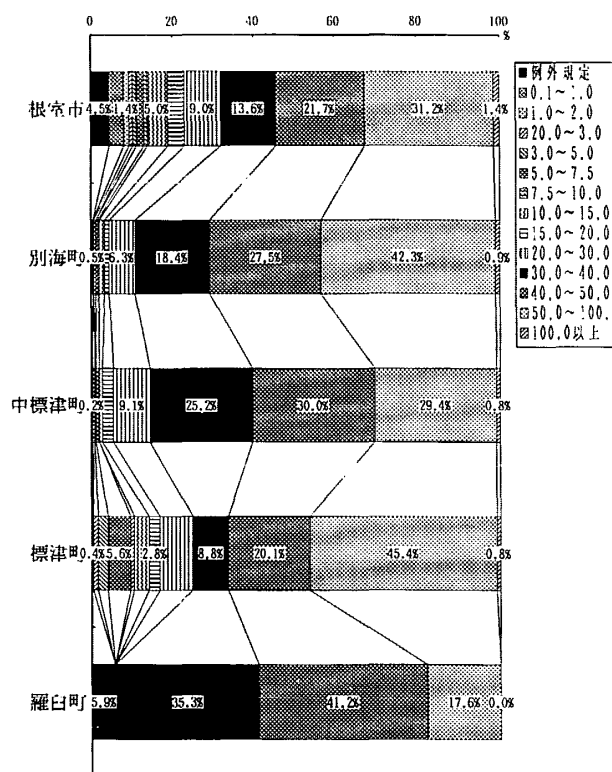
第42図 釧路管内の専業農家，兼業農家の割合  
その 1



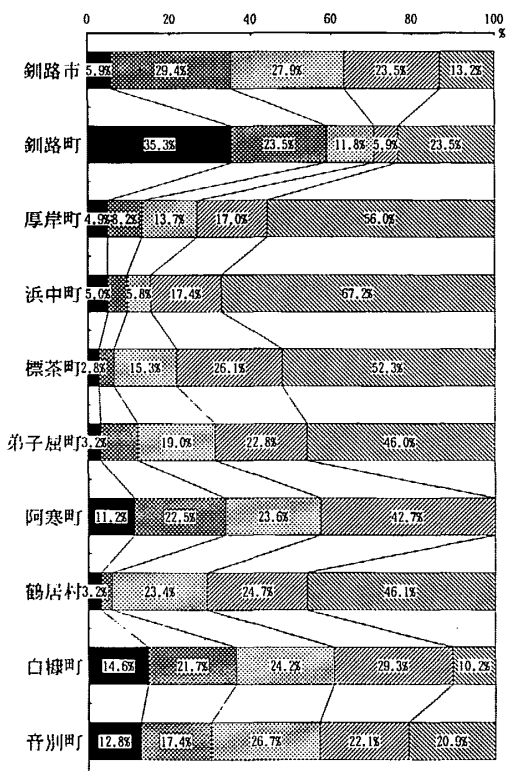
第42図 根室管内の専業農家，兼業農家の割合  
その 2



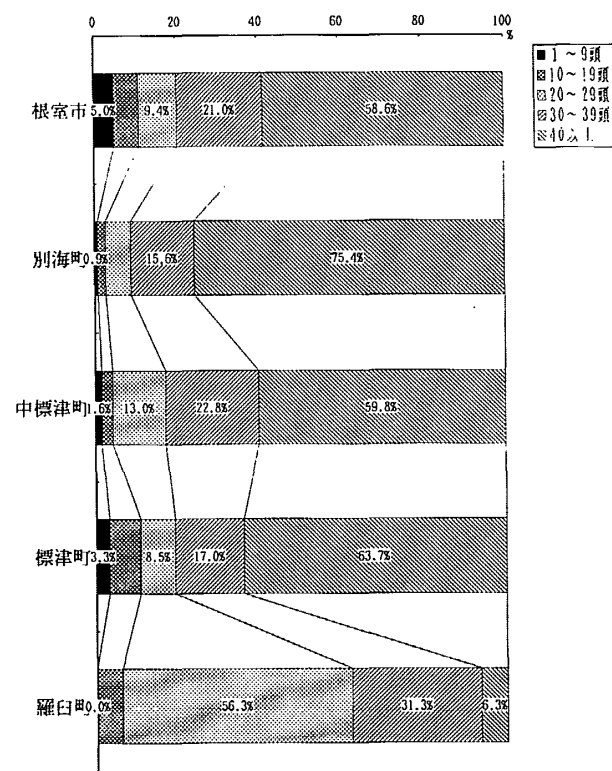
第43図 釧路管内の経営規模別農家数  
その1



第43図 根室管内の経営規模別農家数  
その2



第44図 釧路管内の乳牛の飼養頭数規模別農家率  
その1



第44図 根室管内の乳牛の飼養頭数規模別農家率  
その2

### (1) 草地酪農東部地区

飼料作物面積が最大なのは別海の 58959 ha, 隣接する標茶 25182 ha で 2 位, 中標津が 3 位であるから, 乳牛総頭数でも全国一を誇るに足る草地酪農地域である。また農家数で別海は 1250 戸, うち乳牛飼養農家 1181 戸, 飼育頭数 100173 頭で戸当 85 頭となる。農業就業男女人口 4691 人で 1 人当 21 頭計算になる。

根釧の第 1 位部門別農家数は第 41 図をみれば, 酪農家率が 80% 以上の町村が 60% を占める。その中で肉用牛農家比率が比較的高いのは, 標津・阿寒・鶴居・音別・浜中・釧路町が 7~10% を占め, また農産物比率の高いのは釧路市・釧路町・白糠である。

専兼別農家数では第 42 図の如く根室が圧倒的に専業率が高く, 75% 以上となるのに対して, 釧路は釧路市・釧路町・阿寒町が 50% 前後の外は 60%~70%, 両者共兼業では第 1 種の比率が高い。経営規模別では第 43 図の如く根室で 30ha 以上層は 50% を越し, 釧路では厚岸・浜中・標茶・弟子屈・鶴居が大きい。逆に経営面積の小さい比率の町村は畑作の比重が若干高くなる。飼養頭数規模別農家率を第 44 図に示した。羅臼はいうまでもなく漁村で農家数 17 戸であるから論外におく。酪農専業地区と内陸部の畑作との関連がみられる。

### (2) 酪農畑作内陸部地区

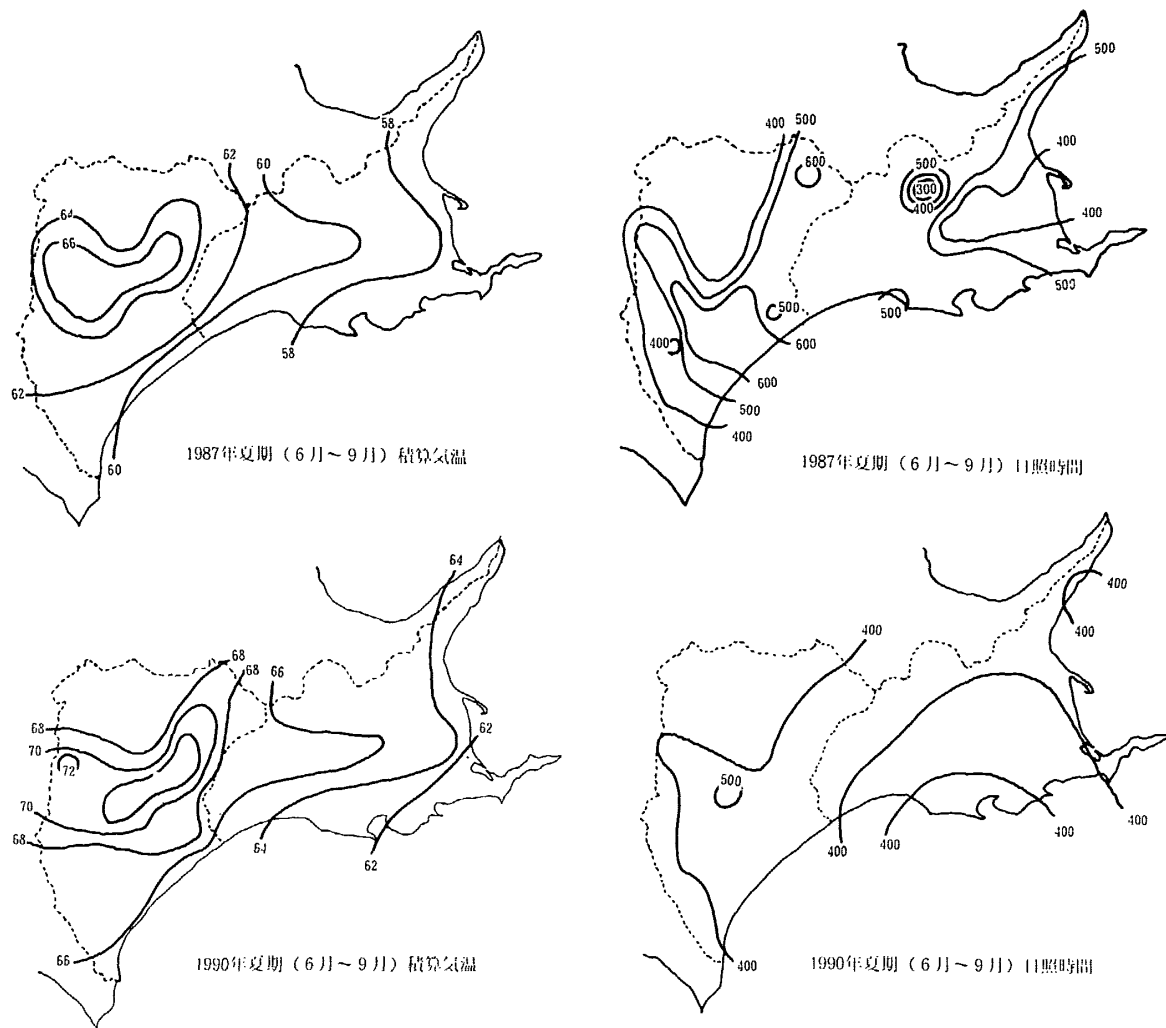
根釧内陸部といっても町村が内陸に広く延びているので市町村単位での区分はややむづかしい。例えば別海という一町村を取上げて中央部から標茶よりと沿海よりでは同じ酪農といっても相当の開きがある。ややこづいけ気味なのであるがビート作付では中標津・弟子屈が 271 ha と 263 ha で根釧の中では多く, いもは同じく 1103 ha と 718 ha で他町村はいずれも 1~14 ha, 標津だけが 87 ha となっている。ところが野菜になるといずれも微少で釧路町 101 ha が特別で標茶 64 ha, 阿寒 81 ha, 釧路市 50 ha 以外は別海 4 ha, 浜中 1 ha, 根室 12 ha, 厚岸 7 ha で特に内陸部で多いということはない。然らばその原因は何かということについて少し次節でみてみよう。

## IV 十勝地域

第 1 次世界大戦に十勝の豆がヨーロッパに輸出され, 豊作の度毎に豆成金ができたという話を聞くが, 水田転作も手伝って水田地帯の空知でも結構の産出をあげている。しかし価格保障のない豆がやはり換金作物の王者に位するのが十勝ではある。しかし十勝も山麓や沿海部は豆生産には適せず, 中央部でも冷害凶作の対応から, いも, ビート等根菜類の奨励によって, 冷害の被害を少しでも少なくする施策が実施されてきた。水稻の消滅もその一例である。しかし澱粉用馬鈴薯も自由化により作付制限を自主的に農協経由で行っており, ビートも同様である。畑作自体においても大きなうねりが起きてきているのである。またこれらの畑作物が根釧でもかつては作られていた。それが現在の姿になるのには長い歳月を必要とした。

豆・ビート・いものいずれも十勝中央部(音更・芽室・帯広・幕別)において面積が大きく収量も高い。豆は年によって異なるがその範囲を清水から本別, 豊頃まで拡げる。青刈デントコーンは十勝全域に及ぶ。そして根釧はあるかなしかなとなる。それは第 1 に気温の関係なので, 第 45 図 1987 年と 1990 年の平均気温の積算図を作成した。すると, 両年共大体同じ型がみられるが, 温度差では 90 年が 5℃ 程度高く, 根釧では沿海部が十勝中央部より 10℃ も積算で低い。つまり中央部の有利性がみられるわけで, 根釧の低さも草地への移行という自然との対応の中で行われたのであった。なお日照時間についてみると, 1987 年は根釧内陸と十勝山麓と沿海部が少なく, 90 年には類似はするけれど根釧が不足していた。

作物の生育期間の温度差が限界地帯の農業に与える影響は至って大きかったのである。またその影響下において草地酪農が展開し, 青刈デントコーンとの併用と両者共に輸入の濃厚飼料投与による乳量の増収もはかられたのである。現在の姿がどの様なものかは個々に述べてきたのであ



第45図 道東の平均気温と日照時間

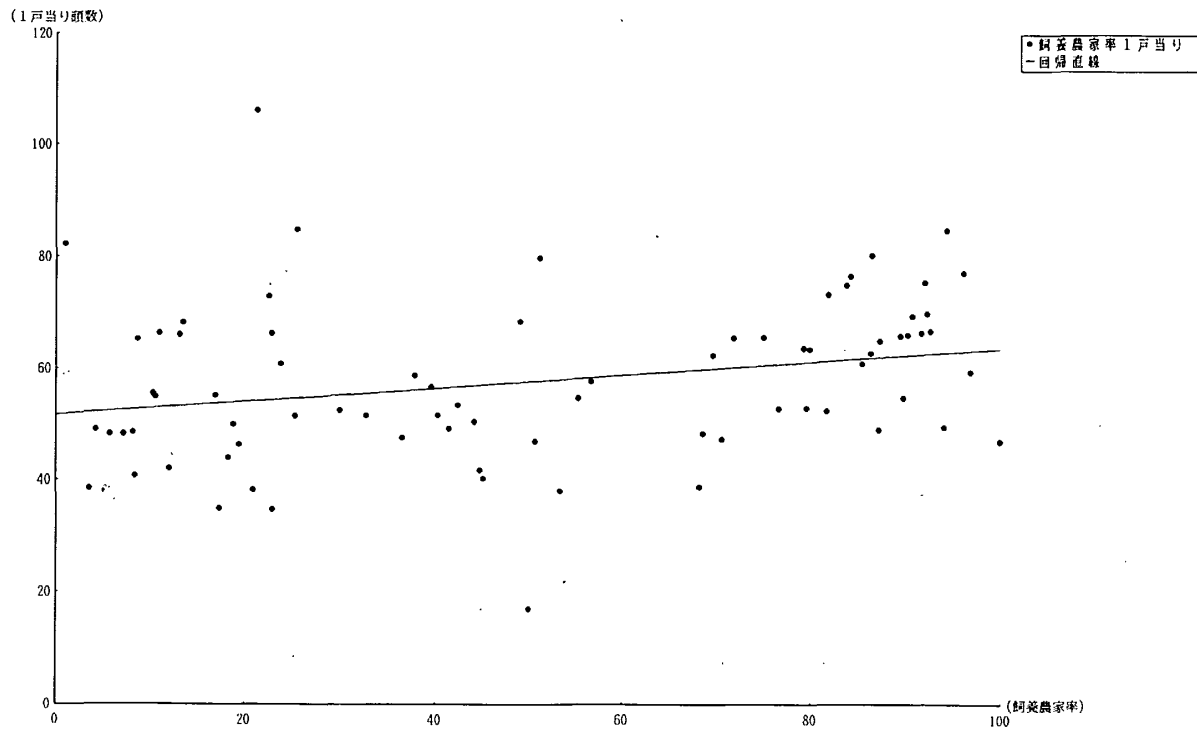
るが、道内での酪農地帯といわれる全域の1戸当り頭数と飼養農家率の相関をみると第46図の如く、いずれも50頭前後のところに集まり、若干飼養農家率が高いところが多くはなっているが、全体としてみると、一つの例外を除けば大体平列の状態にあることが解る。だが農家率が低くても頭数が多い町村もみられる。

次にこれを実数でみると第47図の如く、この図は十勝・根室・釧路・留萌・宗谷をプロットしたものであるが、別海は欄外に出て入っていないが、回帰線に大体のっているのが根釧で、十勝は農家数のわりには頭数が多くない清水、本別があり、他は大体回帰線に沿っている。留萌・宗谷も豊富を筆頭に回帰線に並ぶ。このことは全道においての多頭化の技術水準は一定レベルに達していることの証左ともなる。

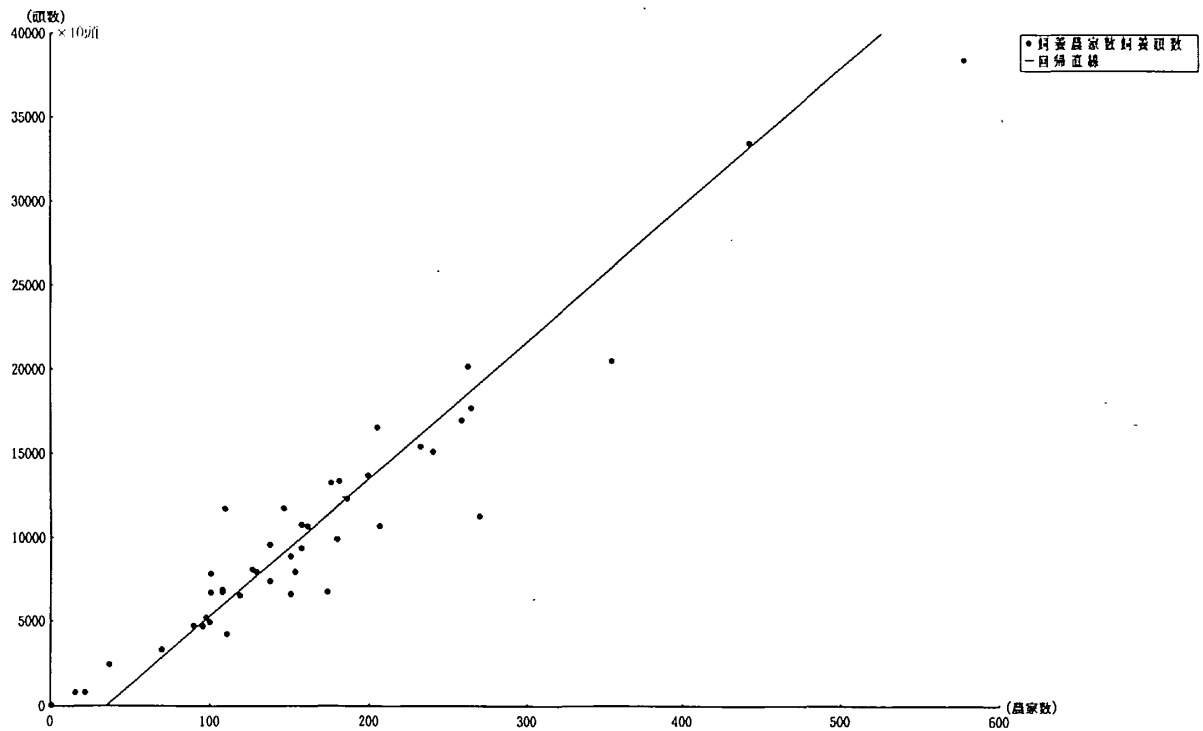
#### (1) 畑作中部地区

第1位部門別農家数で中部地区をみると、第48図の如く、その代表は芽室町になる。64%が雑穀・いも・豆、ビートは5%、麦14%の構成となって、特にいも・豆の比率の違いが各市町村を格付けている様子が解る。またいづれの町村でも酪農が入っている点、また養豚も町村によってくみ込まれている点も見逃せない。

専兼別では第49図の如く、専業が70～88%までに達し、1兼が多いが2兼は少ない。経営規模（第50図）では沿海・山麓以外は20～30haまでが大部分となっている。畑作の家族労働での適正経営規模の問題とのからみが出てくるが、畑作物用の機械の改良が、比較的高水準の作業能率を



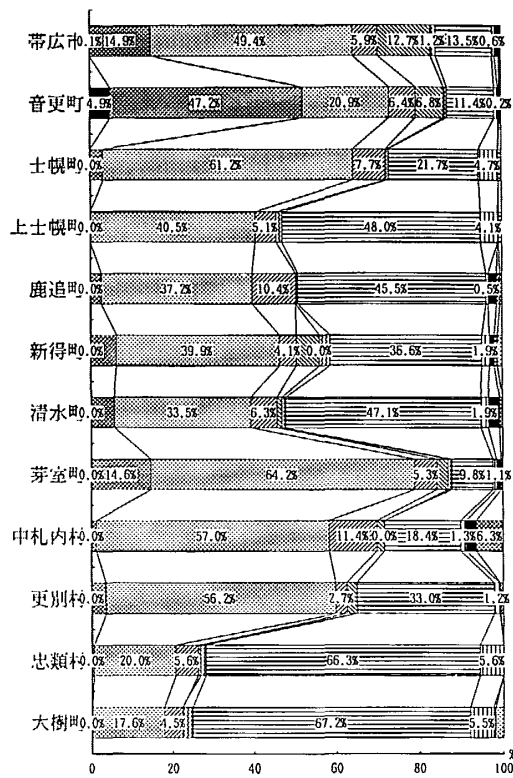
第46図 乳牛（十勝・留萌・宗谷・釧路・根室・網走・札幌・江別・八雲・長沼・早来）の  
1戸当り頭数と飼養農家率の関係



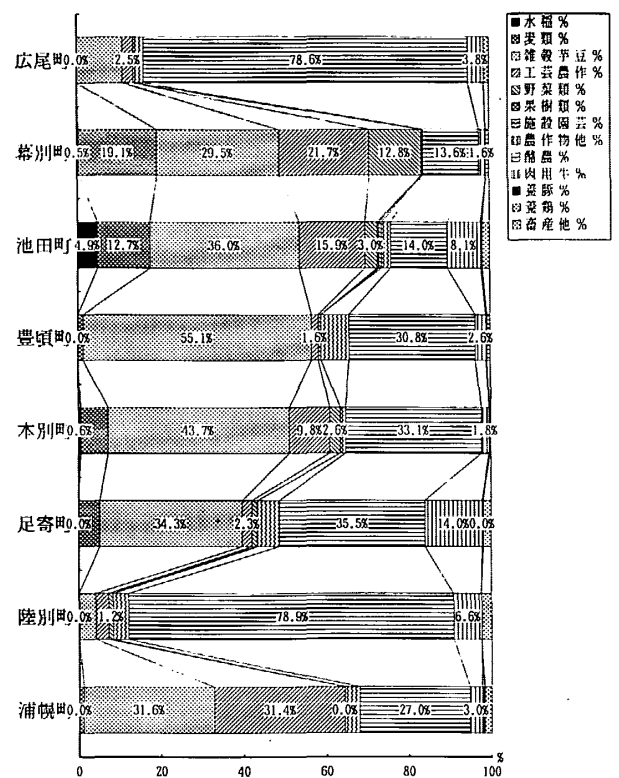
② 別海を除く。頭数は10頭単位。

第47図 乳牛飼養頭数と飼養農家数の関係（1990）

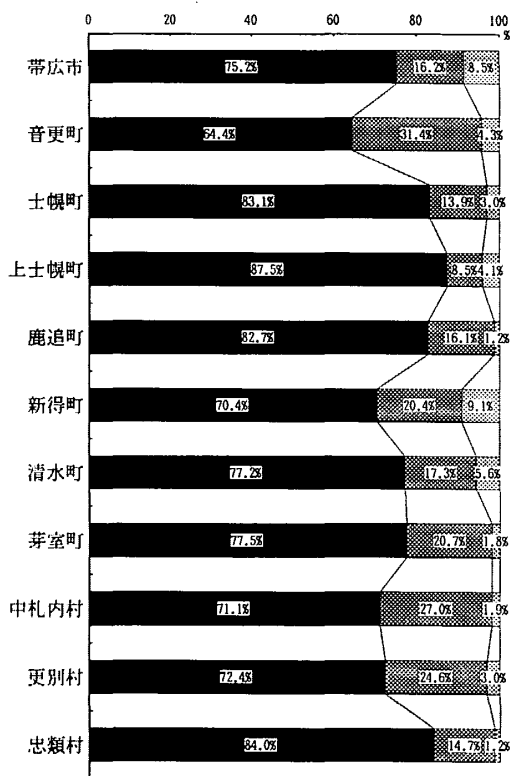




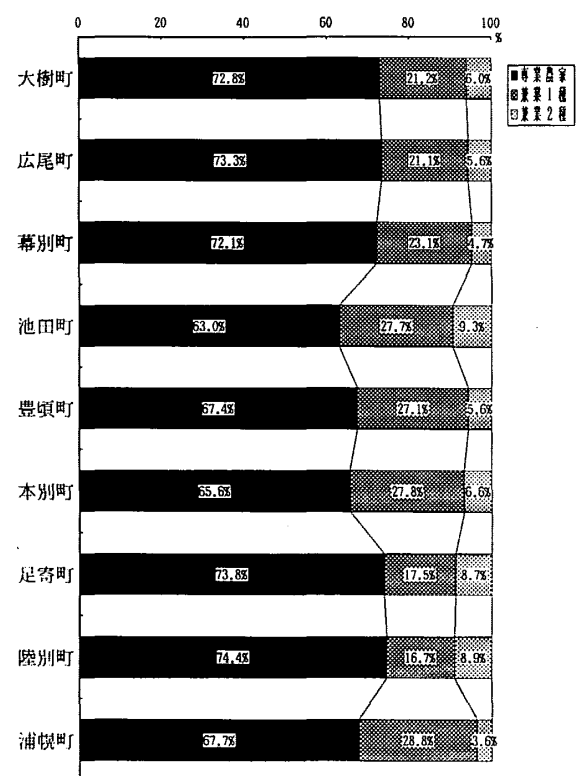
第48図 十勝管内の第一位部門別農家数  
その 1



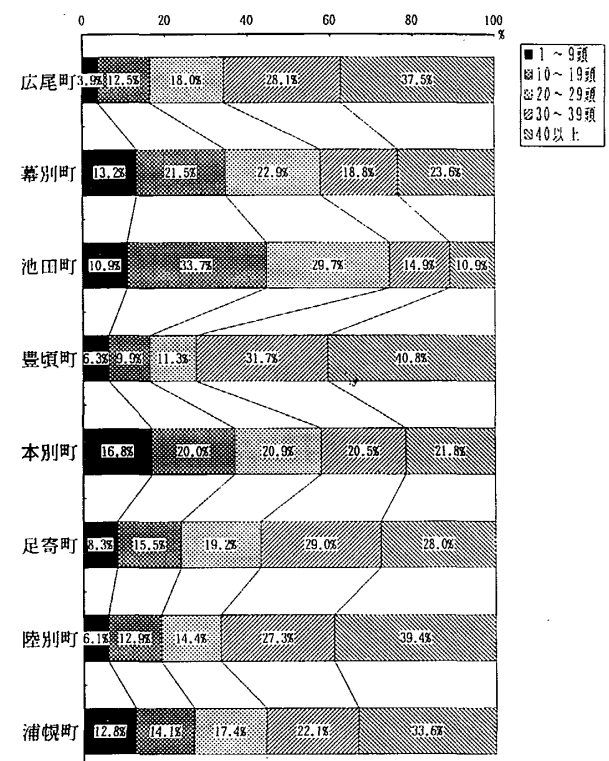
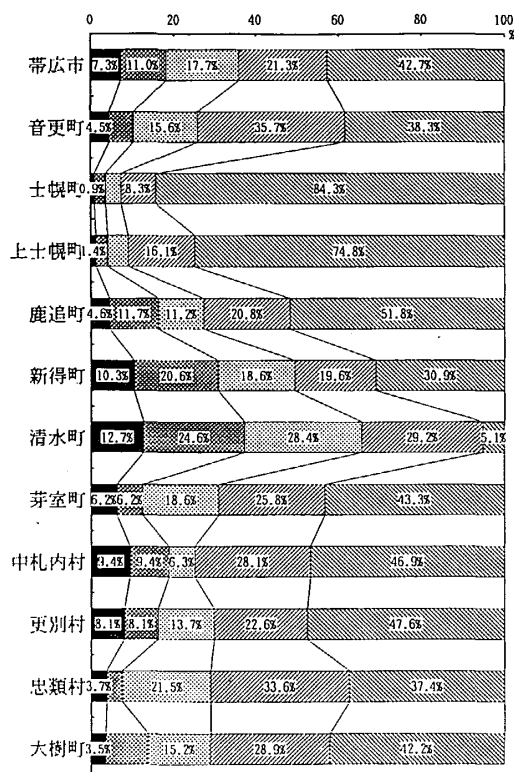
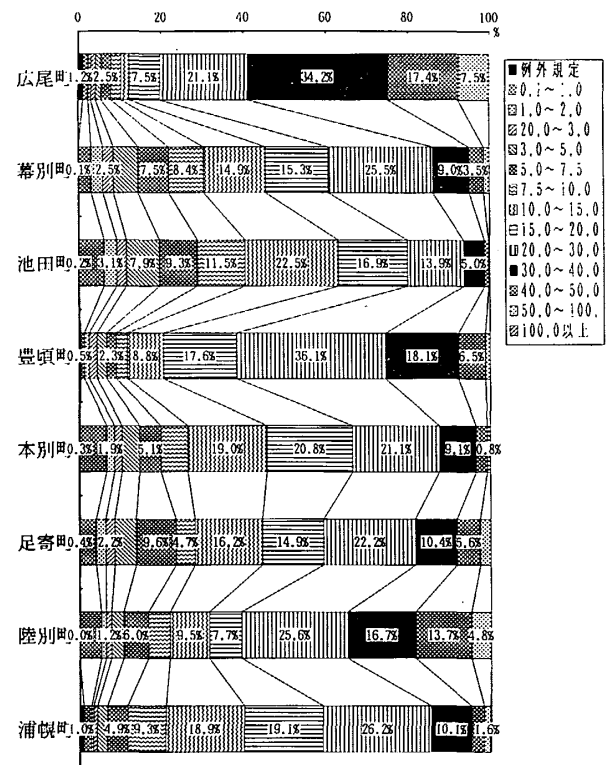
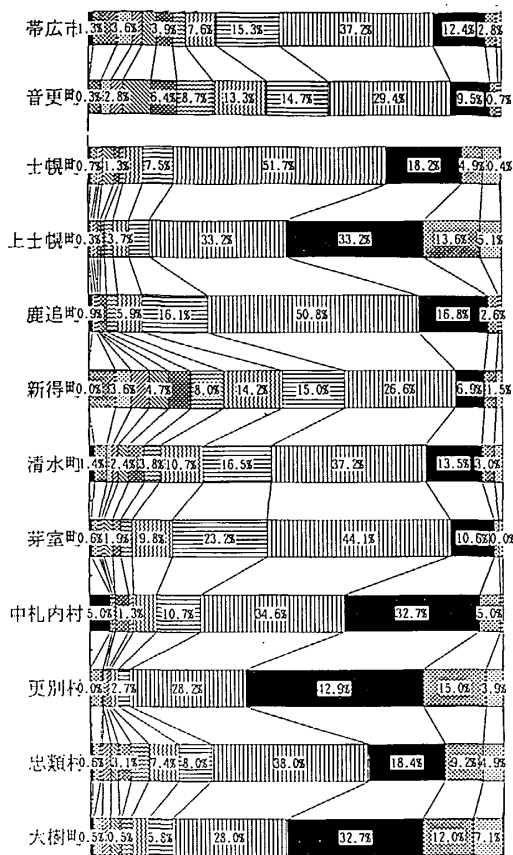
第48図 十勝管内の第一位部門別農家数  
その 2



第49図 十勝管内の専業農家、兼業農家の割合  
その 1



第49図 十勝管内の専業農家、兼業農家の割合  
その 2



あげるのに役立っている点は見逃せない。最後に乳牛飼養規模別農家率（第51図）では平野中央部でも前記の如く多頭化の傾向はあるが、未だ小規模のものもみうけられる。これは酪専ではなく畑作との混同経営によるものである。

## （2）酪農畑作山麓・沿海地区

十勝の山麓・沿海部は酪農化において根釧に準ずる酪農地域を形成した。しかし前述した様に本地区においても麦・豆・いも・ビートの作付が多い点に特色がある。また野菜も上士幌・広尾・忠類・えりも以外は比較的多く作付され、特産地も形成されている。つまり山麓では上士幌・足寄・陸別が酪農専業に近く、新得・鹿追・清水と本別・池田・浦幌・豊頃が中央部の芽室・帯広・中札内・更別・幕別・音更・士幌と山麓酪農との中間的存在であり、沿海の忠類・大樹・広尾が酪専に近く、えりもは酪専のみという構成ができあがっている。

## 7. ま と め

北海道の農作物の構成をもとにその類型化を試み、農業の空間構造の分析をすすめ、その結果を地域区分して、各地域の農業構造の特長を述べた。北海道という単元のなかで、地域的特長はと問えば、北海道には3つの農業中心地が存在したということである。1つは空知の水田を核に上川・留萌・石狩の周辺地を包含する拡がりであり、1つは十勝の畑作を中心地として、豆類かいかの違ひによって二次的中心地が斜網地区に見出された。1つは根釧の別海が核になって、根釧のみでなく十勝山麓・沿海も含めた形での地域形成であり、二次的中心地が天北の宗谷を中心としてオホーツク沿海に拡がっていることである。

そしてこの3つないし二次的中心地を入れて5つの核が存在するということは、核と核の中間地帯が両者の特質を具備するということで、漸移帯として存在する。それが宗谷・オホーツク沿海の内陸部であり、十勝山麓周辺であり、釧路の十勝よりであり、留萌であった。見方をかえれば、これらの漸移帯こそ今後の農業情勢の変化のなかで、大きく動く可能性をもつということが判明した。なお本編において論ずべき点が余りにも多く残されている。技術の問題、品種改良の問題、生産地移動の問題等々である。これに牛乳を例にとれば流通の問題が加わる。いずれ別の機会を得たいと思う。

なおこの小論を作成するにあたり、中川志津君、佐藤由紀子君、岡崎紀子君、中村真生君、野房麻樹君、中山恭誉君の協力を得たことに感謝の意を呈する。

## 参 考 文 献

北海道立総合経済研究所編	北海道農業発達史Ⅰ・Ⅱ	中央公論事業出版	1963
食料・農業政策研究センター編	北海道の農業	同所	1983
湯沢 誠・三島徳三編	農畜産物市場の統計的分析	農林統計協会	1982
七戸長生・大沼盛男・吉田英男	日本のフロンティアのゆくえ	日本経済評論社	1985
牛山敬二・七戸長生	経済構造調整下の北海道農業	北海道大学図書刊行会	1991
森川 洋	中心地研究	大明堂	1974
林 上	中心地理論研究	大明堂	1986
内田 実	北海道農業人口の変化構造	北農 59巻1,2号	1992